安永七戊戌年　越新發田連中

歳旦

元日の　一房　洲江
それはふんぞりやたびの春
愛しとの虚実知らず　石雅
谷川の流も末に日のさして　記井

各詠

蓮葉や居て露も一下位　流照
あれは笑顔あやれ若菜哉　桃仙
そのくし嬉しんして御慶哉　几也
年玉や商人の手にうれふ　記井
敷藁に鶯く頃よ庭ゑしき　花業
一声けて梅もゆかりとたびの春　麻丁
来初の舟や恵方へ向けて年　萬向
合点して馬も詳める初荷哉　竹亮
初若やかしく扇の絵も鶯　松亭
おもふまふ出来や若菜初　成功
書初や斎れも紛よえる嫁ん　竹連
唸ほをやかれくく挨拶好　桃曲
蛇のの光り日下にかゝみ鏡　得三
常にきく音かしみどり稼　取中
拙けく今年の光りや玉の春　二桃
素弱や柳をしえん手をとゞ　棠秀
下駄音も千鳥足うら伝ひ哉　洲乃
花の月よ待ちしのを初鳥　初白
あけぼのや松明はよ門かしき　江雨
うれかかや咲さぬうちをまん　亢芳
大根やどまちてきぬゆりかん　雪径
庭山も今朝奥深し初霞　雑菊
ごり形りも遠かくえん年男　巴江
素ろれや柳も摺を吹之し　石雅

年にあたりし
表をむえて　向上舎
引込むままおとゝ得へさらけ哉　蟲甲
唸ほえの酔や花の夜明し　沾戸
室も来るへうえん咲や初氣色　秋路

家もれ物える
を笑われるし　一房

物えるも
まの花かりく
半けせん　豊井

同

[illegible]尾　歌仙行一順

一房へ贈きしに沖津の
梅よ吟をえらめて　石雅

開しん吟をも梅よも居られ　豊井
菜に谷りし音信の方　洲江
こりの若柄を寂へおくらせて　流照
坂とならんで年地目抜　記井
ほ字れい跡さ絵姿を鈎けさせ　花業
る小枝葉の火もまわる吹れ　几也
ウ　あつくのうち宵宿よ月の影　麻丁
思いかうしの鮎小打網　萬向
笑ん花い湯治を出よ知葉时　成功
載よ二面をほける福えの　得三
うるさいやれも晴ん懐疑　棠秀
かく満んや縁くほ言葉　松亭
湯出あける団子よ小豆の棒らえ　竹亮
お寺の使れ借もるふ吹れ　取中
宝えりよ補らる力弱れ角　二桃
月切をした今よ質札　桃仙
花の時京い貴銭もみんいらひ　洲乃
嵐を枝よ引山の鴨　桃曲
わおがの舞陣も春よ幸吹に　江雨
暖もみんよ酒えらうり　初白
菊いみくさきく挽天みさせ　亢芳
雨もえまりよ待く文の数　雪径
誠り情もえふる蛙の詩く声　雑菊
貴しきおろれい起も帰らを　此連
仲今いいはてい為の法　巴江
花よ帝の売もとの花

隠家よ勧仕の古へを
おもひ出して
けふしきのむらしにゝ吟を哉　蟲甲
庭掃て宮秘んかしの夢　沾戸
越さし扇ろとくもちのや年の坂　秋路

亡桃国のむかし仕えも
あり併しにえらく
従けて
咲花や尽お應に
宗よ咲せ　一房